

7

筑波大学 3年 八木原 愛乃

離れられる集合住宅



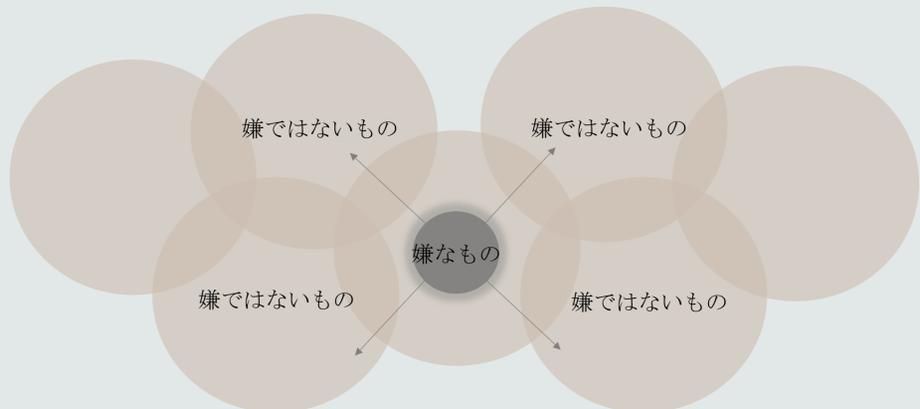


# 離れられる 集合住宅

筑波大学  
八木原愛乃

## 離れたいときに離れられる

人、仕事、物、何に対しても近づくことよりも離れることの方が難しいのではないか。嫌なことから離れることができれば、自ずと嫌ではないことに近づいていく。この集合住宅では、離れることと集まることの矛盾する2つが同居している。この矛盾が建築の強制力を削ぎ、人々から滲み出るものを邪魔しないのではないか。近づくことはときに愛となり、離れることもまた愛となりうる。他人と適切な距離を絶え間なく測れる建築が、今の人々にとって必要な建築なのではないか。



この住宅は公園やオープンスペースが入り組んでいるため、帰路で人に会うことが多くなると考えられる。この住宅では全ての棟において、駅方面からのペデと2階部分の共用廊下が繋がっている。人に会いたくないときは、人通りの少ないペデから家に直接帰ることができる。

## 人に会わずに帰れる

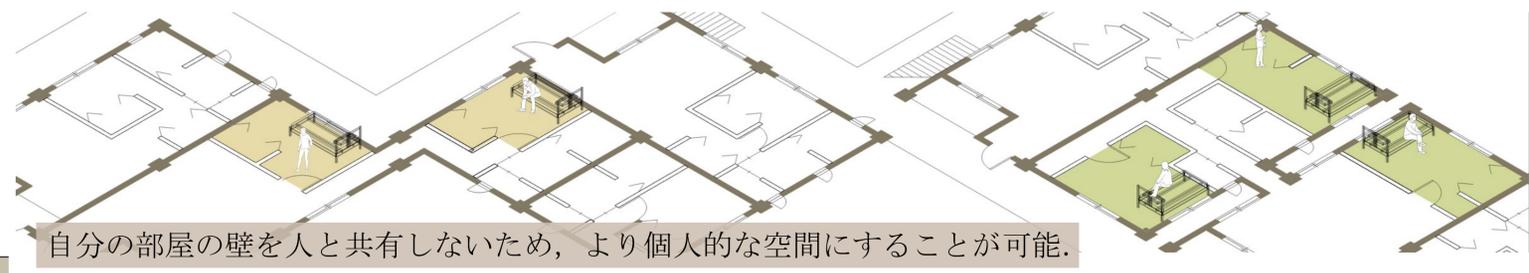
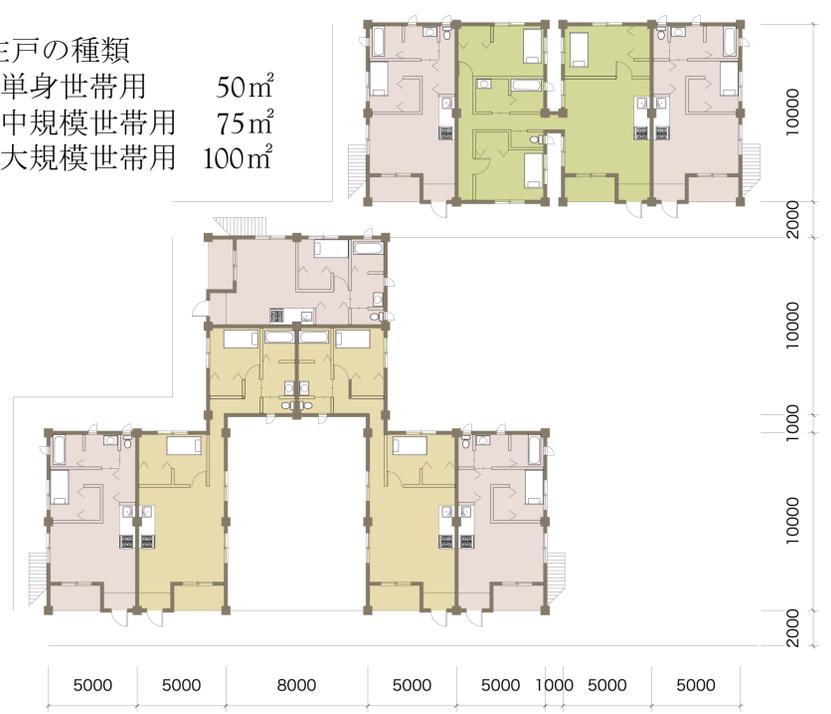


動線図・全棟2階平面図 縮尺 1:500

## 自分ひとりになれる

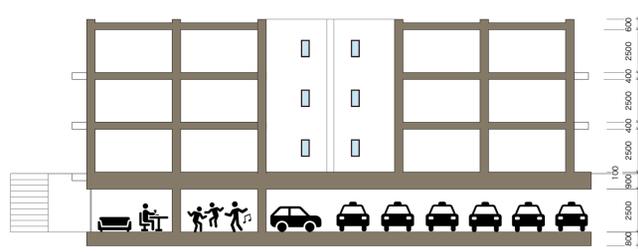
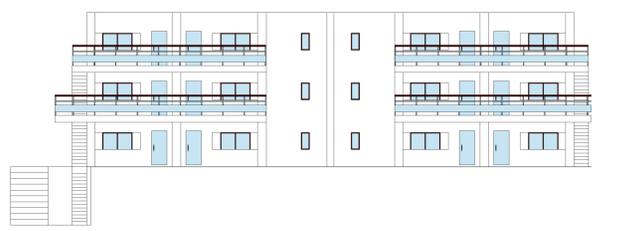
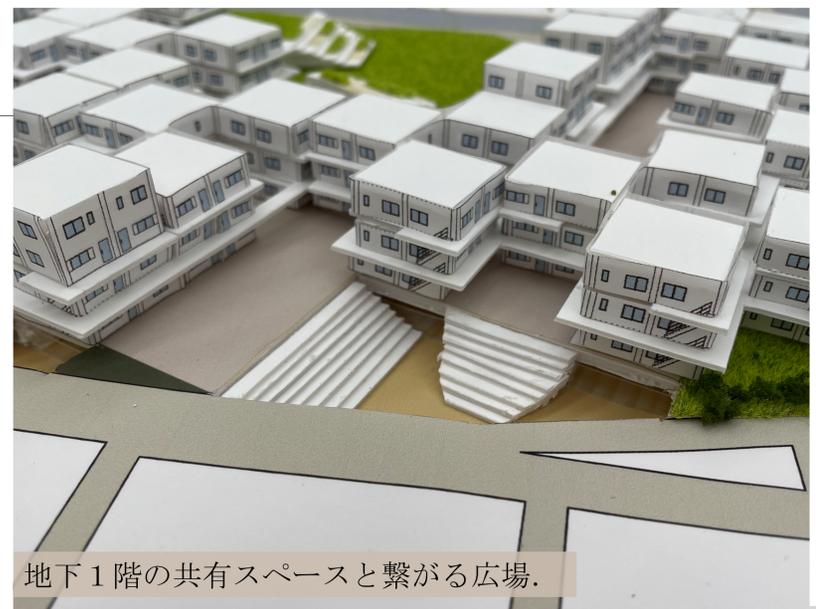
住棟同士が複雑に繋がっており、各住戸で、各々の部屋の壁を同居人と共有しないようになっている。他人の物音や気配を感じないため、家の中でも離れたいときに離れることができる。窓が多く、彩光も充分。

- 住戸の種類
- 単身世帯用 50㎡
  - 中規模世帯用 75㎡
  - 大規模世帯用 100㎡



## 欲求を満たす

やりたいことをやれる積極的なアプローチとして、共用スペースは小規模なものを複数設けた。ワーキングスペースやスタジオ、キッチン、くつろげるソファなど、様々な用途で使われるようなスペースを設けた。地下1階であるが、西側の窓ガラスから光が入っている。駐車場も地下に配置した。



# 居場所になりうる公園

この集合住宅には、公園が住棟に入り組んでおり、アメーバ状になっている。  
公園には階段状の坂や山をつくった。質の良い既存樹を残し、その下にウッドデッキを設置した。  
これらは、座れそうな隅っこを増やすイメージでつくった。  
狭かった歩道を増幅し、人とすれ違うことを容易にした。  
同時に、公園と歩道との境界を曖昧にし、公園の回遊性を高めた。  
増幅した歩道部分に車を数台駐車可能なスペースもある。



既存樹の下のテラス付近には、芝生を植えず、そのままの土を残した。自然を感じられる空間。



階段状の坂では、人々が思い思いに過ごすのではないか。  
芝生の上をステージに見立てれば、観客席のようにも捉えられ、  
イベントが行われるかもしれない。  
人々の向きを住棟の方へ向かわせず、プライバシーを守る働きもある。



山で様々な遊びが行われたり、  
斜面に座ってくつろいだりするかもしれない。